

十日と記憶する。懐かしの舞鶴港に入港する。

これで本当にダモイ東京が実現した。夢のようだった。検疫を済ませ、十一月三十日、夢にも忘れなかった近江富士が眼前に映り涙があふれ落ちる。

シベリア抑留体験記

滋賀県 常喜 正和

私は、昭和二十年三月上旬と五月下旬の二回の空襲を東京の部隊にて体験し、親子爆弾を身近に受け、その恐ろしさを目のあたりに見ながら、五月三十日付で満州の部隊に転属を命ぜられ、即日出発いたしました。

空襲被害のため東京駅や横浜駅も列車運転は休止にて、やむなく新宿より小田急にて藤沢に出て、東海道線を下り滋賀県の故郷に立寄り、いざ出発のとき、今度は大阪、神戸の空襲に遭遇す。仕方なく京都より山陰線にて和田山回り山陽線の姫路駅に出て、一路下関に向かう。

憲兵隊より、東京、満州の両部隊に連絡をとり命令を待つも、玄海灘は米軍潜水艦の出没激しく、出発の目当ても絶たず、やっと四日目に山陰仙崎という小さい漁港より漁船にて、夜陰にまぎれて玄海灘の高波に救命胴衣をつけて釜山に上陸した。

言葉も通じない外地は初めて、若輩の身の一人旅、急行列車なれど周りは朝鮮や満州の人たちばかり、日本内地は国防色一色なるもこの方々は民族衣装の真っ白の服装に、かえって気持ち悪く思いながら、東京出発より十二日目にやっと新京に到着した。

内地に比べて平穩の満州も、次第に戦雲急なるをひしひしと感じる中、七月三十日に八月十五日までの予定で吉林郊外に出張したが、八月上旬ソ連との開戦に部隊との連絡もとれず、出張中なるもやむなく帰るべく新京に向かつて無がい車に乗る。途中駅にて軍司令部と一一緒に移動してきた部隊を発見、急ぎ隣のその列車に飛び移り、吉林經由通化に至り、ここにて終戦を迎え、はっきりしなかったが、玉音放送も聞いた。

命より大切にしていたあの八月二十日の武器返納式、

今思い出しても悔し涙が出てきます。その後吉林大学に集合させられ、次々と編成していずれかへ出発していく。私たちも新京經由ハイラル、チチハル、満州里を経てソ連面に入り、バイカル湖手前のプラットホームもない小さい駅におり、駅より六キロの収容所に入り、九キロ、十二キロ、二十キロと次々奥地の収容所へと移動し、初めての冬を迎う。

移動のたびに服装検査を受け、腕時計や高価なものは銃を向けられ次々取り上げられ、同胞として素手のため悲しい思い出です。

厳寒の中、丸太小屋の収容所の建物の整備も終われば、いよいよ原始林に入って赤松、落葉松の積み込みの「ベストラ」「ベストラ」の「ノルマ」攻め。皆初めての仕事で能率が上がらないから、食糧を減らされ、減らされるからますます上がらず、二か月間風呂に入らず、休みなし。シラミの大蔓延に回帰熱の続発、体力の消耗もその極に達し、伐採作業のときなど、木の倒れる方向がわかっているながら逃げる事ができず、木の下敷きになつて死ぬ人が出たり、作業能率が上がらないから朝暗

いうちに収容所を出て、一里くらいある現地の作業地に着いて夜が明け、現地で暗くなってから一里ほどの山道を収容所に向かって帰る。この行き帰りの雪道に転びながら一言の声を発する人もいない無言の行進は、死の行進そのものだ。

疲れて帰り診療所に行つて診察を受ける場合、外傷がある場合は見てわかるが、神経痛等は表面から見てもわからないから認められず、無理して出るので毎日のように死者が出る。作業ノルマは若者も老人も同じため、老人は若者に迷惑をかけたくないため無理をする。若い者でもこのような状態の中でノルマを完成できるものはほんの一部、できて年寄りの分もやり、老若共倒れの状態で死者や病人が毎日続発する。

収容所の建物は、周囲は丸太を積み上げ、屋根は丸太を並べた簡単なもので、一人分の幅は六十センチくらいで、やっと足を延ばして寝られる程度で、中央に土でつくった暖炉があり、寝床は二段になっていて、上段下段とも座つてやっとくらの高さ、窮屈さで、一晚中不寝番がまきをたくため上の者は暑くて寝られず、下の者は

枕もとにずっと氷が張り、上の者の防寒具も全部借りて寝る始末にて、上段下段とも熟睡できず、二、三日で交代するが、どちらも熟睡できない日の連続であるため病人がでたり、作業能率の上がないのは当然である。昨夜寝るまではお互い言葉を交わしていた友が、朝起こしても声もなく冷たくなり死んでいたこともありました。

作業場の往復の狭い雪道の真ん中にちょっと太いツツジの枝が曲がって雪の凍った中に生えている。人々はこれに足をつっ込み次から次へと無言で転んでいきますが、これを見て笑う元気もなく、声を出す者もなく黙々と転んでいく。手前より少し遠回りすればよいのを知りながら、余計に歩くのがいやで次々転んでいく。

このような生死の境をさまよう中で、日本軍の隊長である東北地方出身の某大佐は、ソ連側より作業能率が上がらないため毎日のおどされているが、全責任は私にある、私の体はどうなってもよいから、諸君は無理をせず体を大切に、元気な体で全員日本の土を踏むように頑張るしてほしい、絶対無理をするなど、皆に訓示され、悲痛なる気持ちを語られたことは、昨日のように

思われます。

私たちは苦勞しながら帰国し、体力も回復し、四十年余りとなるが、両耳の耳たぶに凍傷のあとを残しながらも、彼の地にて犬死にした人たちのことを思い、今後とも頑張りたい。